二〇〇六年度福岡女学院大学大学院人文科学研究科
比較文化専攻生　修士論文要旨

高市黒人研究――「船」を中心に――

陣内　未加子

万葉歌人高市黒人は、旅に関わる歌を十八首万葉集に残している。黒人歌には、黒人の見るものが多くの場合去ってゆくものとして描かれているという特徴がある。例えば、

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚なし小舟（巻三、二七二）

と、船が漕ぎ隠れようとするところをうたい、

早来ても見てましものを山背の高の槻群散りにけるかも（巻三、二七七）

という一首では既に散ってしまった槻の木を前に、早く来て見ればよかったと嘆くのである。また、

いづくにか我が宿りせむ高島の勝野の原にこの日暮れなば（巻三、二七五）

と日暮れをうたうのも同様である。他に、

古の人に我あれや楽浪の古き京を見れば悲しき（巻一、三二）

楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも（巻一、三三）

右の二首は荒れた古い都を見て「悲し」とうたうものであるが、既に眼前にないという点ではやはり去っていっ

たものである。

このような黒人歌の態度は、旅の愁いや悲愁、不安などを表わすものとされているが、そのように評価される黒人の文学の達成とはどのようなものであったのだろうか。小研究では、黒人が七首にわたって詠みこんだ「船」という表現に執することにより、その内実を明らかにするのが目的である。

まず第一章では万葉集に収載された船をうたう歌を巻別に概観し、その表現を詳細に見てみた。しかし万葉集における船のうたわれかたは一様ではなく、巻ごとにその特徴を見出すことはできない。

それでは、歌人別に見た場合はどうであろうか。第二章では黒人が活躍したと思われる第二期の歌人、柿本人麻呂、大津皇子、弓削皇子、春日蔵首老に焦点をあて、次に、活躍の時期は異なるが黒人と同様に宮廷に仕えたと思われる歌人、山部赤人の船の歌を検討する。

初めに、人麻呂、大津皇子、弓削皇子そして赤人の船をうたう歌には、妻あるいは恋人などを思わせる人物を詠みこむという特徴が見られたが、それは黒人には見られないものである。老の船をうたう歌には人物は詠みこまれていないが、船泊まりをする時間に黒人との認識の違いが見られた。自らが乗船する場合で尚且つ停泊をうたうとき、老は周囲が明るいうちに「船泊て」をうたうが、黒人が停泊しようとする船は、既に夜が更けてしまい周囲の明るさなどは感じられない時の中にいるのである。

そして、赤人においては船に向けて「ともし」という表現を用いて故郷を思いやったが、黒人はそのように心情を表わすことばで故郷をうたってはおらず、こうした点も黒人の創作の特徴といえよう。しかし黒人が船をうたうとき、人物への関心が希薄になり、船だけを注視していたことをどのように捉えるべきであろうか。この問題について、第三章では黒人の船をうたう歌からいくつかの表現をとりだし、比較する。

人麻呂、赤人、黒人歌から一首ずつ見てみると、人麻呂と赤人は、対象は異なるが見ることへの期待をうたっているという点では共通していると考えられる。しかし、黒人は船だけを注視している。黒人が「夜」を歌に詠みこむとき、黒人の船はすでに更けてしまった夜の中で停泊地を求めるものであったが、それは夜を避け、より安定を求めることのあらわれといえよう。加えて、黒人が船をうたう歌で「見える」とうたうとき、その対象はすべて船であるが、そのように黒人の視線が船に注がれるのは、黒人が船に自己を見出そうとしたことのあらわれと思われる。

黒人がうたう船はいずれも華やかに表現されることはなく、黒人以外の人物もほぼ見られない、小さく孤独な船である。黒人がうたう船とは、やはり黒人自身を表わすものだといえるであろう。黒人は船をうたうとき、心情を表わすことばをあまり用いていないが、ことばで表現しないかわりに、黒人の歌にあらわれる船の様相が黒人のうたおうとする旅愁をあらわすものとなっていたと考えられるのではないか。

このように、旅愁の内実を、決して華やかではなく人物も詠みこまない孤舟の景として表現することが黒人の文学の達成であるといえよう。